

かけがえのない家族のかたち

岐阜大学教育学部附属小中学校 9年

坂口 凜

「あなたにとって、家族とは、どのような存在ですか。」

私は、父親のいない家庭で育ちました。幼い頃は、それが『ふつう』だと思っていました。誰かと比べることも無く、「これが私の家族だ」と信じて疑いもしませんでした。しかし、成長するにつれて、その『ふつう』が少しずつ揺らぎ始めました。

運動会の「父親参加競技」でスタートラインに立つのは母親。教室に並んだ「父の日の似顔絵」は、私の画用紙だけが空白。友達は何気なく話す「うちのお父さんね……。」という言葉に、私はただ笑って頷くしかできませんでした。そのような話を聞いて、「私には、何が足りないのか?」「もし父親がいたら、私はもっと違う自分だったのか?」私の心の中の家族のかたちがひとつ、またひとつと崩れていくような気がしました。そして夜、一人で布団にくるまりながら、もう思い出すこともできない「お父さん」の姿を何度も何度も涙でぬらして想像しました。

そんなある日、気付いたことがあります。それは、母親はいつも私の名前を一番に呼んでくれている、ということです。母親は、朝も夜も働き、どんなに疲れていても私の名前を呼んでくれました。私が泣いた時には背中をさすり、友達とけんかした時には、何も聞かずにそばにいてくれました。水泳や絵画、いろいろな事に挑戦して失敗しても、必ず言ってくれる「大丈夫。」の言葉に安心しました。怒られても、嫌なことがあっても、怖いことがあっても、毎朝私が家を出る時に母親が言う「いってらっしゃい。頑張るんだよ。」を聞くと不思議と前向きな気持ちになりました。どんな私でも「大丈夫だ」と、そう気付いたのです。私の人生は「欠けて」などいない。欠けてなんかいなかったのです。

5つ離れた妹は、私よりもずっと小さい身体で、いつも私の後を追いかけてきます。喧嘩をして、「ついてこないで。」「あっち行って。」とひどいことを言って全力で逃げても、離れても、振り返ると必ず追いかけてきているのです。そして、まっすぐな目で私を見上げ、「お姉ちゃん」と呼んでくれます。私は思うのです。私は愛され守られている。それだけでなく、「守りたい命」も確かに与えられているのだと。父親がいないからと言って、私の役割が小さい訳ではない。私もまた、この家族の一部であり、誰かの支えであるのだと。それは皆さんが一般的に考える「家族のかたち」ではないかもしれませんが、私にとっての家族はこれで十分すぎるほど温かったのです。

家の中に限った話ではありません。私の学校には、「かぞく」と呼ばれる小学1年生から中学3年生の縦割り班があります。年齢を超えて活動をしたり、遊んだりすることで、相手を思い合うこと、助け合うことの本当の温かさを感じています。

学校でうまくいかないことがあった時には、友達と話をしながらいつもよりゆっくり帰りました。泣きながら喧嘩をすることもありました。一緒に悩み歩める仲間がいることに私は何度も勇気づけられました。

母や妹、そして友だちや縦割り班の「かぞく」。私の周りには、血のつながりや「役割」にとらわれず、私を思ってくれる人たちが、ちゃんということ。そして、「家族」は血の繋がりでだけでなく、こころの繋がりでできているのだと気付かされました。

ある日、母がふとつぶやいた言葉があります。夜、洗濯物をたたみながら、独り言のようにこう言いました。

「あなたがここにいてくれるだけで、私はもう十分幸せ……。」

母は、誰よりも強く、誰よりも優しく、私と、そして妹と同じ歩幅で、ずっと歩んでくれたのです。その言葉に、私は涙が止まりませんでした。だから私は、この人生を何かが「欠けていた」とは思いません。これが私という一つの完成したかたちなのです。

私は、誰かを想い、誰かを守って、今ここにいます。母の必死で、それでいて温かく深い愛情。妹の真っ直ぐなまなざし。学校のかぞくや友達とのこころの繋がり。それらは、私を作り上げてくれる、私にとって世界で一番大切な宝物です。

人はつい、「足りないもの」に目を向けがちです。容姿やスキル、お金や地位のように。でも、本当に大切なことは、「すでにあるものの尊さに気づくこと」だと思います。

私は、父親のいない家庭で育ちました。幼い頃は、それが『ふつう』だと思っていました。誰かと比べることも無く、「これが私の家族だ」と信じて疑いませんでした。しかし、私の周りには、母親、妹、縦割りの「かぞく」友人がいます。

手を伸ばせば温かな愛が息づいている。私にとって家族とは、そんなかけがえのない存在なのです。